法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-02

日中合同・法政大学タクラマカン沙漠の調査

伊藤, 玄三

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
45
(開始ページ / Start Page)
122
(終了ページ / End Page)
126
(発行年 / Year)
1993-03-24

Hosei University Repository

日中合同・法政大学タクラマカン沙漠の調査

伊藤玄三

一　調査報告

タクラマカン沙漠は、中国最西端の新疆ウイグル自治区にあり、南を崑崙山脈、北を天山山脈、西をパミール高原に囲まれた世界第二の内陸沙漠である。この沙漠の西南部にあるケリヤ河流域の調査を日中合同で実施したいということが伝えられたのは一九九〇年のなかばの頃であった。当初、ワンダーフォーゲル部を中心とし、学術調査を加えたものとする考えがあったが、その後学術調査を主体とする方向がとられ、具体的に中国科学探険協会を窓口として北京で折衝が続けられ、一九九一年八月二十二日～九月十三日に第一次調査が、翌一九九二年八月五日～九月八日に第二次調査が実施された。法政大学側としては、タクラマカン沙漠調査実行委員会を組織し、募金活動をはじめとして初めての海外調査の推進に奮闘した。調査組織は、法政大学文学部三井嘉都夫教授を総隊長とし、日本側は地理学・考古学・文化人類学・ワンダーフォーゲル部のメンバーからなり、筆者も日本隊隊長として終始参加してきた。考古学・歴史地理学分野としては、大学院生小倉淳一・田部秀男の両君も加わっている。なお、中国側は、中国科学院地理研究所・新疆生物土壌沙漠研究所・中国科学探険協会からのメンバーが参加した。この調査は、中国側の受け入れ体制からしても沙漠の調査にウエイトがおかれるものであったが、「水文環境と人間」という調査目的の中で、私達は沙漠内の考古学的遺跡や現在の住民の民族考古学的検討などを考えて赴いた。もちろん、先史時代から現代までの沙漠地帯での人間の歴史的変遷と環境変化は、地理学との提携で期待できるものが大きいという点で、国際的な総合調査はまたとない機会であったといえよう。

調査対象は、具体的にはタクラマカン沙漠西南部のケリヤ河・ホータン河・ニヤ河の流域とその周辺であった。調査それぞれの詳細は、調査報告会や研究会、さらに報告書などにまとめられる予定であるので、ここでは筆者の踏査を主として述べることにしたい。

Hosei University Repository

二　沙漠の遺跡

第一次調査においては、沙漠の遺跡とはいってもオアシス近傍の遺跡を見る機会があった程度であった。ホータン河流域のヨートカンとメリカワチである。

ヨートカン遺跡は、かつてスタインなどの調査もあって、古代の「于闐」の国都に比定されている。しかし、現在見ることのできるヨートカン遺跡は、ポプラ林の中に民家が散在し、低地は稲作水田となっている。どこが遺跡かと疑われるような変化をしてしまっているが、水田間の深い小川の断面、地表下約二メートル程には多数の土器片を包含する層があり、現地の子供達も遺物をえぐり出していた。近年、黄金製のアヒルが出土したとも聞いた。かつては土製面などかなり出土しており、有力な遺跡であったことは認められるが、今は地下に殆んど埋もれてしまっているのであろう。

メリカワチ遺跡は、ヨートカンとは対照的にはるかに見通せる殺風景な沙漠遺跡であった。ところどころに城壁跡が残り、幾つかの高まりには溶滓が認められ、窯業も盛んであったことがうかがえた。小さく波うつ沙漠原のあちこちには多量の土器破片が散在していた。この遺跡も一部調査されており、寺院跡や官衙跡と推測される区域も知られている。それにしても、南北三キロにもわたる広い遺跡が沙漠化している現実は索漠たるものであった。

この二つの遺跡は、共に「于闐」の重要な都市遺跡であると思われるが、オアシスに近い為の破壊なども加わって荒廃してしまっているのかと推測された。メリカワチ遺跡は、第二次調査の折にも再度踏査する機会があり、砂嵐の中を南端近くまで歩いて見た。かつてメリカワチ遺跡の北端部では、大甕中から約四五キログラムの五銖銭が発見されており、年代は漢代までさかのぼるものであることが指摘されている。

第一次調査の折には、他に田部隊員達の沙漠横断隊によって、ホータン河中流のマザルターグ遺跡が踏査されている。望楼跡などを残す交通の要衝の遺跡である。

第二次調査では、筆者と小倉隊員は、まず于田近傍のカズナック遺跡を訪ねることができた。ケリヤ河支流の涸れ河の左岸上に存在するこの遺跡は、背の低い漠地性の草が点在する砂原の中にあり、ここもまた一見遺跡らしいものは見あたらなかった。しかし、案内の現地ウイグル人の鍬先に掘り出された土塊の中には、蓮花文様らしき壁画残片が知られ、この地点が以前に調査された寺院跡かと推測できた。一九八三年の調査では、大型の蓮花文仏座や壁画が遺存し、八個の仏頭も出土しているといわれる。その西方一帯には土器片の散在も認められ、径三〇〇メートル位の遺跡は推定できるかと考えた。けれども、後で文献で知り得たところでは、この遺跡の西北方にかけてはかなり広大に遺物分布地点が知られており、漢代に「渠勒」といわれた国が存在した地域であり、カズナック遺跡はその一部とみられるものであった。ともあれ、この遺跡の荒廃ぶりもすさまじい限りであり、土器の散布でもみられなければ遺跡と認めることは甚だ困難であろう。

これらのオアシス近傍の遺跡に対して、第二次調査においては

Hosei University Repository

ケリヤ河下流の沙漠中央部に存在するカラドン遺跡群を見ることができた。計画では、このカラドン遺跡群の一部をなすマジリク遺跡を訪ねることだけが許容される範囲であるとされていたが、実際にはカラドン遺跡に立つことができた。この遺跡は、既に二十世紀初頭にスタインの調査があり、一辺六〇メートルの方形塁壁をもつ顕著な遺構が認められるとされていた。于田オアシスの下流へ二〇〇キロも離れ、現在は河流も到達しない広漠たる沙漠中に存在するこの遺跡は、無残に倒れ、散在する建築材の折り重なった姿となっており、僅かの建物跡に立柱をみることができる程度であった。しかし、砂丘に埋もれた部分には、なお遺構をたどることができるかと推測された。飛砂と猛暑の中で半日、この建物群の柱位置の略測を行ったが、どうやら極めて隣接して建てられた建物が方形に連なったものであり、中央部にも建物が配された遺跡であったと推定された。その建物群が砂に埋れて、恰も方形の塁壁状に見なされてきたようである。時期は、少なくとも二時期あるだろうと思われる。いずれにしても、計画的な建物配置を有する点では有力な遺跡であり、既に漢代の「扜弥」国の宮殿の一つであるとか堡塞であるとかの説があるが、にわかにはきめ難いものがある。ここでも、漢代の五銖銭が発見されたとされ、紀元前までさかのぼる遺跡であると推定されている。遺跡及びその周辺には土器片や獣骨片が散在しており、獣骨では羊を主として馬・牛・ラクダなどの家畜がみられる。同時に、穀物を砕いて粉食にした石製臼や、面餅を焼いた平底鍋、灌漑用水跡なども認められる点では、この地ではかつて灌漑農耕が行われていた可能性がある。恐らく主牧副農のオアシス集落を想定してあやまりないであろう。

この遺跡から東側には遺物散布も広くみられた。西南約一キロでは柱木の林立する小規模な建物跡があり、寺院跡とされているところと判断された。カラドン遺跡の東南方約五キロでは、濃密な土器散布を示すマジリク遺跡がみられた。一九八八年に中国隊の調査があるが、鉄鏃・鉄刀・甲片なども採集されているけれども、建物などは判明していない。恐らく、これらはカラドン遺跡群を構成する一連の遺跡であり、この地域にかなりの集落群が存在したものであろうと推測した。そうみれば、現在は全くの波うつ砂丘の中に位置するこの地域も、かつては緑に恵まれたオアシス集落の集まりであったと類推することができよう。因みに、このカラドン遺跡から西南方はるかに認められているダンダンウイリク遺跡は漢代扜弥国都とされており、この一帯が二千年前から栄えたオアシス国家の領域であったことは周知のところである。しかし、この領域も、ホータン地区にあった于闐国によって後漢後半には兼併されてしまう。于闐の版図に入ってからもこの地域の集落は存続はしていたようであるが、その後の資料は明確とはなっていない。

なお、第二次調査の折のニヤ河流域調査隊は、著名なニヤ遺跡に到達している。田部隊員が踏査に参加しているが、柱などの遺存状態はカラドンなどに比較してはるかによく、沙漠奥地の遺跡の方が荒廃を免れていることは明らかである。

Hosei University Repository

三　沙漠遺跡の性格と環境

ケリヤ河流域からホータン河・ニヤ河の三河川流域で若干の遺跡を踏査することができたのであるが、これらの遺跡は多く土器・金属器・家畜骨などを出土し、明らかに農耕・牧畜を生業とする人々の遺跡であった。しかも、漢代五銖銭が出土していることを指標とすれば、少なくとも紀元前二〇〇年頃まではさかのぼるものとすることができる。しかし、それ以前の石器時代の遺跡はほとんど見出されていない。

ところが、ケリヤ河上流の崑崙山脈中腹部などには細石器様の石器を出土する遺跡があり、いわば狩猟・採集段階の遺跡が知られている。これらの遺跡は、概して小規模であり、極めて移動性に富んだものであったと推測されている。それに対して、沙漠低地に進出している遺跡は定着的な集落を形成しており、恵まれた中流域では城壁を有するオアシス都市を作っている。そこでは牧畜にかなりウエイトがおかれていながらも灌漑農耕が行われ、各種の生産活動も盛んであり、交易も広く行われるような社会であったことが知られている。

そして、紀元後、特に于闐支配下のこの地域では仏教が盛んであり、主要遺跡では殆んどの場合仏教寺院跡が認められ、仏像や壁画が知られている。それは沙漠奥地のカラドンでも例外ではなかった。この時期、インド方面からの影響も顕著であったことが知られるところである。しかし、これらの仏教的なオアシス国家も、十一世紀初めまでのイスラム教徒の侵入・支配によって決定的に変えられてしまう。今、ケリヤ河流域などにみられるウイグル牧畜民の生活は、このような歴史的変遷の結果である。

現在のケリヤ河のウイグル牧畜民は、極めて苛酷な自然環境の中で生活している。僅かに天山からの水が供給できるオアシスを除けば、沙漠地帯の限定植生環境では農耕は全く不可能であり、しかも家畜の干草刈りや唯一の木ともいえる胡楊の枝切りなどは、貧弱な植生の一方的な消耗を強いている。オアシス地帯の灌漑農業の為のダム建設は、下流への水を止めてしまい、それでなくとも塩分の強い水が年々河流をなくしてしまい、涸れた河床は砂丘をうねらせることになっていく。このような環境での牧畜民の将来は極めて悲観的なものではないかと考えさせられた。今、彼等牧畜民は、家畜以外の食糧を政府から供給されているので生活がなり立っているので、オアシスへの移住の勧誘をも拒んでいるとも于田県長から聞いた。しかし、幾年後までそれが続くのであろうか。

古代から現代までの沙漠地帯の変遷をみていくと、灌漑農耕の技術と牧畜の採用がこの地域での人間活動を可能にした要因であることは理解された。しかし、その後は自然環境の変化——自然的な沙漠化の要因も大きいけれども、どうやら人間の過剰な自然物略奪体制（過放牧や過採集）がそれに拍車をかけていき、加えて戦争などに伴う集落の破壊、灌漑施設の放置が更に被砂現象を加えることになっているらしいことに気づかされる。そして、現在のオアシス農耕の推進すらも河流の減少を招いているとなれば、人間活動が著しく沙漠化に作用していることは否めない事実と

Hosei University Repository

なってくる。砂漠化といわれるものが、かくも人間活動の歴史とかかわるものであるとは、緑濃い日本では思い及ばぬところであった。

沙漠の中のカラドン遺跡の傍に高くきわだっているタマリクスコーン（土堆）に座して考えた遺跡の変遷は、強大な自然の営力と共に、人間の絶えざる自然とのバランスの破壊の営みであるのかと「負」の意識を強く感ぜさせられたのであった。

末尾になったが、本調査に法政大学史学会も後援を快諾され、多くの方々の御寄附や激励を賜ったことを心からお礼申し上げる次第である。